

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Vietnam-Australia Relationships in Chinese Nùng Places of Worship

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芹澤, 知広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009533

ヌン族の華人の宗教施設に見る ベトナムと移民先国家との関係

Vietnam-Australia Relationships in Chinese Nùng Places of Worship

芹澤知広

SERIZAWA Satohiro

Abstract: *Chinese Nùng* is a group of Chinese migrants from Quang Ninh (formerly Hai Ninh) Province in the northern part of Vietnam, who settled in the southern part of Vietnam in 1954. The group's common language is *Baihua*, a vernacular form of Cantonese that served as the common language used in the markets of China's Guanxi Zhuang Autonomous Region. However, the largest linguistic group is the Hakka, whose ancestors settled in Vietnam between the 18th and 19th centuries. In the latter half of the 19th century, Hakka migrants worshiped Guanyin, whom they had brought with them from China. Places of worship that were built in the southern part of Vietnam after 1954 for gods specific to the Chinese Nùng, still exist, including the Huguo Guanyin Shrine. In addition, since 1975, after leaving Vietnam and resettling abroad, they have been building the same kind of structures in their countries of resettlement (e.g., Australia). This paper examines the relationships between the Chinese Nùng network, Vietnam, and Australia, based on the recent donations to Chinese Nùng places of worship in southern Vietnam.

1 はじめに

本稿は、ヌン族の華人がベトナムとベトナムからの移民先国家とのあいだで行っている宗教活動を通じて、中国国外での客家人のグローバルな動向を紹介することを目的としている。とくにベトナムとオーストラリアのあいだの関係を探ることから、日本の文化人類学や華僑華人研究の分野においては実地調査研究の蓄積の少ない、オーストラリアへの客家人移民についての情報を提供したい¹⁾。

本稿で取り上げるヌン族の華人の宗教施設は、多くが「護国観音廟」という名称をもつ。この護国観音廟は、19世紀に中国広東省恩平県からベトナム北部の市場町ハーコイ(Hà Côi; 河檜)へと入植した客家人に起源する。しかし客家人とヌン族の華人とが完全に合致するというわけではなく、護国観音廟では観音以外にも、ヌン族の華人の信仰に特徴的な神格が祀られている。このことについては、筆者はすでに別稿で論じている(芹

澤 2018)。しかし本稿の論をすすめるうえで護国観音廟を紹介する必要があるため、次節以下では別稿と重ならない情報を加えて、まずは基本情報を提示することにした。

なお筆者は、1993年以来ベトナム南部のホーチミン (Hồ Chí Minh) 市において、ベトナムの華僑華人に関する実地調査を断続的に行っている。ヌン族の華人に関係する情報は、2005年にホーチミン市の護国観音廟を訪れて以来、集まるようになった。近年では、ベトナム北部のクアンニン (Quảng Ninh; 廣寧) 省のハーコイを2012年と2014年に訪れた。また2012年には、北部から南部へ移住したヌン族の華人の最初の入植地にあたる、ベトナム南部ビントゥアン (Bình Thuận; 平順) 省のソンマオ (Sông Mao; 潼毛) を訪れた。またソンマオとホーチミン市のあいだにあって、ヌン族の華人が多く住むドンナイ (Đồng Nai; 同奈) 省のフォックハイ (Phước Hải; 福海) を2012年に、同じくドンナイ省のロンカイン (Long Khánh; 隆慶) とディンクアン (Định Quán; 定館) を2017年に、それぞれ訪れた。

とくに本稿に関係したオーストラリアの護国観音廟については、ニューサウスウェールズ (New South Wales) 州のシドニー (Sydney) を2010年と2015年に訪れ、そしてヴィクトリア (Victoria) 州のメルボルン (Melbourne) を2018年に訪れて、それぞれ実地調査を行った。

2 ヌン族の華人と客家人

現在のベトナム社会主義共和国の民族分類で「ホア (Hoa; 華)」とされている華人は、2009年に行われたベトナム政府の人口調査によると、823,071人を数える (Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office 2010: 134)。このうちホーチミン市には、414,045人が居住する (Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office 2010: 211)。

ホーチミン市の華人社会では「唐話」と言われる広東語が共通語として話されており、「華人」のことを広東語では「唐人」という。その唐人のなかに、「防城話」や「海防話」と広東語で呼ばれる独特の広東語を話す人々がいて、彼らは広東語で「防城人」や「海防人」と呼ばれている。そして、この人々のことを、ベトナムの研究者は「ヌン族の華人 (Hoa Nùng)」と呼んでいる。本稿での「ヌン族の華人」という分析用語は、このベトナム研究者の用語に拠っている。

ヌン族の華人は、現在のベトナム・クアンニン省、かつてのハイニン (Hải Ninh; 海寧) 省に1946年に成立した「ヌン自治区」から、1954年にベトナム南部のベトナム共和国へと移住した人々とその子孫のことである。彼らは、まずビントゥアン省のソンマオに集団入植し、その後ベトナム南部各地へと移動した。ヌン族の華人は、フランス軍、ベトナム共和国軍の軍人を多く輩出し、1975年のサイゴン陥落後には、アメリカをはじめ

外国へ移住した人々も多い。

いっぽう現在のベトナム社会主義共和国の民族分類では、「ホア」とは別に「ヌン(Nùng; 儂)」とされている民族がある。このヌン族はタイ語系の言葉を話す民族で、中華人民共和国の民族分類でチワン族(「壮族」とされている民族と同じ系統とされている。チワン族は、ベトナムとの国境に接する広西チワン族自治区を中心に居住している。

2009年のベトナムの人口統計では、ヌン族は968,800人を数える(Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office 2010: 134)。そのうち、中国広西チワン族自治区と接する、ハザン(Hà Giang; 河江)省には71,338人、カオバン(Cao Bằng; 高平)省には157,607人、ランソン(Lạng Sơn; 諒山)省には314,295人、クァンニン省には1,246人が居住する(Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office 2010: 150; 154; 163; 165)。

このヌン族とヌン族の華人との違いについては、『八桂僑史』第3期(1996年)に初出の、向大有の文章、清風著『儂族』考(清風は向大有のペンネーム)がわかりやすい(清 2005)。

向大有によると、ベトナムの「ヌン族」の名称には2種類があり、1つはカオバン省、ランソン省などに住むベトナム社会主義共和国の民族分類のヌン族(向大有の用語では「高諒儂」)で、もう1つがフランス領時代の「ハイニン・ヌン族自治区」に由来するヌン族(向大有の用語では「海寧儂」)である(清 2005: 342)。

向大有によると、ハイニンに居住していた漢人の多くは「艾人」や「山艾」と称し、「艾話」(客家語)を話していた。彼らは、17世紀から20世紀にかけて、欽州、廉州(今の北海、合浦)、防城港、霊山からハイニンにきた。その一部は、太平天国の乱に参加し、乱が鎮圧された後、1849年から1863年のあいだに清朝政府の迫害を逃れてハイニンへと入ってきた(清 2005: 342-343)。

この古くから入ってきた客家人と、新しく入ってきた客家人の、2つの客家人のグループがヌン族の華人にあるという指摘は、筆者がソンマオで入手した護国観音廟の印刷物での次の説明に合致する。

「ソンマオのヌン族の祖先は、中国広東省防城県五洞の客家族人〔対応するベトナム語の文章では『người Ngái』〕であり、18世紀と19世紀にベトナムに入植し、ベトナム籍を取得してモンカイ(Móng Cái)、ハーコイ、ダムハー(Đầm Hà)などで暮らした。また一部のヌン族の祖先は、中国広東省恩平県の嘉応州〔ママ〕の客家族人〔『người Hác Cá』〕である。彼らは1865年から70年にかけて移住し、モンカイ、ハーコイ、ダムハーなどに居住した。五洞の客家人と客人人〔ママ〕は、1903年に「ヌン族人」という総称を与えられた。ソンマオには他に、マントインイー(曼清依、Mán Thanh Y)、サンチー(汕止、Sán Chi)、タインファン(清凡、Thanh Phạn)、そしてトー(土、Thổ)〔対応するベトナム語の文章では『少数のトー』〕の各民族がいて、彼らは1954年にソンマオに移民した(観音廟理事会 2004)。

ここで19世紀後半に新たに入ってきた客家人は、「中国広東省恩平県の嘉応州〔ママ〕の客家族人」とされている。恩平県は、明清時代には肇慶府に属し、現在は江門市の管轄になる。現在の江門市に属す台山、開平、新会、恩平、鶴山の5県を総称して「五邑」の語を使用することが現在中国では多い。「五邑」の概念は20世紀の初めに移民先で使われ始めたが、今まで海外では「岡州」や「四邑」の語ほどには普及しなかった（梅、張 2001: 10）。一般には、台山、開平、新会、恩平、の4県を総称して「四邑」という。

嘉応州地域とは、客家人の故郷として有名な現在の梅州市を含む広東省東部にある地域で、四邑地域のある広東省西部ではないため、ここでの「恩平県の嘉応州〔ママ〕の客家族人」は、「嘉応州に祖籍をもち、恩平県に住んでいた客家族人」と解するのが自然だと思われる。

19世紀半ばに客家人が恩平県からハイニンへ入ったことについては、各家に残されている族譜など、文字資料から今後確かめる必要があるが、後述する観音廟の起源に関係して、恩平県の客家が中国からベトナムへ観音を持ち込んだという伝承がある²⁾。

また、この文章では、「五洞の客家人と客人人〔ママ〕は、1903年に『ヌン族人』という総称を与えられた」として「客人人」という民族名が故意に用いられ、客家人の他にも様々な民族がハイニンにいたことに言及されている。つまり、ハイニンのヌン族は客家人だけではない。ハイニンの市場町を考えるうえでは広府人の存在に着目する必要がある。

オーストラリアのヌン族の華人に筆者が聞いたところでは、ハイニンには客家人（「ガイ」＝「艾」）が先に来ていて、後から来た広府人のことを「客人」、その言語を「客話」といったという。この人物の説明では、ヌン族の華人のなかでは客家人が多数派というわけではなく、広府人のほうが客家人よりも多く、後から来た広府人のほうが多数派だったためにヌン族の華人は共通語として広東語を話すようになったという。

また向大有によると、広東巡撫が1867年に広東省の赤溪で客家人に金銭と書類を与えて、高州、雷州、欽州、廉州の開拓をすすめ、それによって欽州、廉州、防城港、靈山への客家人の入植がすすんだ（清 2005: 343）。赤溪とは、客家人と広府人の大きな武力衝突が1867年にあった後に、当時の新寧県（1914年に台山県と改称）から分かれて赤溪庁が設けられた場所で、1912年には赤溪県となったが、1953年に台山県に戻った。この赤溪を、前述の江門の五邑に加えて「六邑」とする場合もある（梅、張 2001: 4）。19世紀後半に恩平を含む四邑地域から、沿岸部をたどってベトナムへと客家人が動いたことは十分に考えられる。

オーストラリアのヌン族の華人に筆者が聞いたところでは、ヌン族の華人には、高州、雷州、廉州、瓊州の広東省西部の4府に由来する「下四府人」という自称もある。いっぽう、ベトナム南部では「冇有人（モウヤウヤン）」という他称もあるという。これは、ヌン族の華人の話す広東語では中国語の「没有」（「無い」という意味）にあたる言葉を

「冇冇」ということに起因する（ホーチミン市、広州、香港の広東語では「冇冇」とは言わず、単に「冇」という）。

広東省西部への客家人の移住は、17世紀よりも前から断続的に行われてきたと考えられる。例えば、黄麗生が族譜からたどる合浦の呉氏の場合では、福建の軍人を募集して広西へ移住させるという明朝の政策に応じて、1471年に一家を挙げて永定から廉州へと移住している。この時のルートは、永定から韓江を下って潮汕地区に入り、そこから海路を西へ進み、高州府の南岸にある電白県（現在の広東省茂名市）から上陸して、さらに西へ進んで廉州へ入るというものであった（黄 2012: 46-47）。

また客家人とは異なり、珠江デルタに祖籍をもつ広府人も明清時代に広西へと進出していた。ステイーブン・マイルズの最近の研究は、広西のなかでも、旧広東省にあたる沿岸部ではなく内陸部に焦点をあてているが、当初は行政官として広西へ派遣された広府人が、後には移住先の広西で科挙の試験を受けるようになったり、広西の自然資源を扱った商業に従事したりすることで、長期間にわたり西江流域にネットワークをもったことを明らかにしている（Miles 2017）。

黄濱によれば、広西の沿岸部（旧広東省地域）において広府人の商人がいなければ商業活動が成り立たないという構造が最高度に達したのが、清末から民国初期にかけての時代である。欽州市では、広府人商人が「粵東会館」を1784年に建設し、1892年に改修している。欽州市にある25の市場町のうち24では広東語が共通語になっている。合浦県では、市場町33のすべてで広東語が共通語になっている。そして防城港市防城区では今も23の市場町のすべてで広東語が共通語になっているという（黄 2005: 153-154）。

ヌン族の華人の故郷であるクアンニン省のハーコイにおいても、広西と同様に、市場の共通語は広東語であった。これは広西の市場町への広府人の進出の延長で、広府人が進出してきたこと、そして広西の市場町と同様にこの地域の経済が広東語を共通語として行われていたことに起因すると考えられる。そのためヌン族の華人のなかでは客家人が多く含まれているにもかかわらず、彼らは広西の市場の共通語である広東語（広西では「白話」という）を、ベトナム南部へ移民した後も自分たちの共通語として話している。

3 ヌン族の華人の宗教施設

ヌン族の華人の中心的な宗教施設は「護国観音廟」である。それが単なる「観音廟」ではなく、「護国観音廟」という名称の観音廟であることが、ヌン族の華人の重要なエスニック・マーカーになる。

その起源について、前述のソンマオの護国観音廟の印刷物では次のように書かれている。

「この廟を建設するのに功があったのは、潘姓のハイニンの知府である。彼は客家人〔対応するベトナム語の文章では『ガイ民族の地元の人』〕であった。知府の役職をミンマン（明命）帝から与えられて、父子代々その職務を継いできた。その潘姓の最後の代の潘方容が、モンカイとハーコイのあいだの4号路にある霊山に、観音廟〔ママ〕を1820年に建て、『霊山寺』と名づけた。〔中略〕1864年から70年にかけて、ハイニンの知府の黄徳士が、客家人がハーコイやダムハーへ移民し、そこで商売をすることを許可し、また彼らが観音を持ってきて祀ることを許可し、彼らの習慣で祭祀を行うことも許可した。そして知府は自ら指導して祭礼を組織した。1870年になって霊山寺に観音が祀られるようになり、『観音廟』と改名した。〔中略〕1896年には、潘方容が人々の尊敬を集めて『案首公公』として観音廟に祀られるようになり、このころから『護国観音廟』と呼ばれるようになった」（観音廟理事會2004）。

護国観音廟の主たる祭祀対象は、観音つまり観世音菩薩である。徐立定という客家人が広東省恩平県から移動する時に、自身の信仰する観音をベトナムへと持ち込んだという伝承がある（胡、范 2007: 386）。

護国観音廟には、他にハイニンの知府であった土豪・行政官の潘方容が、「案首公公」という神格で祀られている。観音とは異なり、案首公公はハイニン特有の地方神にあたる。そして、この案首公公と対になって祀られることの多い神格が「伏波將軍」である（写真1参照）。この伏波將軍について、前出の清風著『『農族』考』では、次のように説明されている。

『海寧農』は、もともと東漢馬援伏波將軍を祀っている。毎年必ず伏波廟へ参る。廟会の日



写真1 ベトナム・ドンナイ省・ディンクァンの116護国観音廟に祀られた案首公公（左）と伏波將軍（右）の神像（2017年8月、筆者撮影）。

は正月六日である。伏波將軍は東漢の人で、嶺南と安南を平定するのに功があった。その忠孝、勇猛、愛国、愛民精神が、客家人（海寧僮）の尊敬を得ている。そのため農族の軍人には、作戦で出陣する時にいつも事前に線香を三本あげて伏波將軍に無事を祈る者もあった」（清 2005: 347）。

ヌン族の華人は軍人を多く輩出しているため、軍人としての馬援がヌン族の華人に篤く信仰されたという理由は考えられなくはない。しかし馬援の祭祀は、ハイニンの地や客家人というグループにも、またヌン自治区の生まれた20世紀にも限定されず、中国からベトナムにかけての広範囲の地域に、長期間にわたって広がっていた。

ベトナム中部の港町ホイアンについての張侃と壬氏青李の最近の研究によると、ホイアンの対岸にあるチャンパ島（現在の日本では「クーラオチャム」として知られる）に伏波將軍廟があり、17世紀後半に福建人が奉納した鐘と香炉が今も残されている。また同じ時代に広東からベトナムを訪れた釋大汕の旅行記「海外紀事」には、このチャンパ島の伏波將軍廟に関して大汕が詠んだ歌が書かれてあり、「復向本頭公」という句が出ている（張、壬 2018: 152）。

このホイアンの事例から考えると、伏波將軍を祀ることは広東・広西・ベトナム北部に限られず、またベトナム南部やタイで現在よく使われている「本頭公」という神名は、17世紀後半のベトナム中部にも見られ、その当時のベトナム中部では、本頭公＝伏波將軍として用いられていたことがうかがえる。

このほか護国観音廟には、「社王」の位牌を祀る祭壇や「社王」のための独立した廟を併設していることも多い。「社王」は土地神と同じ神格である。ベトナム南部では、華人もキン族も盛んに土地神を祀っており、近年は北部のハノイでも南部と同じように店舗や家屋には土地神の祭壇が置かれている。華人は広東語で土地神を「土地（トウテイ）」と呼ぶことが多く、キン（Kinh; 京）の人々はベトナム語で「オン・ディア（Ông Địa）」と呼ぶことが多く、広東語でもベトナム語でも「社王」とは言わない。土地神の名称としての「社王」は、ベトナム南部ではヌン族の華人に限られる。

いっぽう中国広西の沿岸部（旧広東省地域）では、土地神を「社王」と呼んでいる。例えば、筆者が2015年8月に訪れた中国広西チワン族自治区欽州市にある劉永福の旧居には、欽州市の民俗を紹介するパネル展示があり、欽州市では土地神を祭祀する二月二日を「春社日」、「二月社」、「土地誕」と呼ぶという説明があった。そこでは「土地社廟」の前に豚、羊、鶏を屠って捧げ、後に切り分けて各戸に配ることを「分社肉」と呼ぶという説明もあった。広東省の珠江デルタの東端に位置する香港では、土地神の誕生日にあたる祭礼を「土地誕」ということはあるが、供物としての豚を分けることは一般に「分猪肉」という。それに対し広西では、「社王」や「社日」など、「社」という言葉が用いられている。

ステイーブン・マイルズは、広西の「北帝」（「鎮武」や「玄帝」ともいう）の廟を広府人商人の広西進出と関係づけて紹介している（Miles 2017: 117）。ベトナムの首都ハノイの旧市街には「粵東会館」があり³⁾、ハノイ城の北門の近くには「鎮武觀」があつて北帝が祀られている。そのことを思い起こすと、ベトナム北部の市場町における広府人商人と北帝信仰との関係の検討は重要であると考えられるが、ヌン族の華人の祀る廟のなかでは北帝という神格は出てこない。

4 ソンマオの護国観音廟と移民先国家

1954年にベトナム北部からベトナム南部へとヌン族の華人が移動し、ビントゥアン省のソンマオに集団入植した直後にもヌン自治区のリーダーであつた黄亞生の尽力でソンマオに護国観音廟が建てられたことが、ソンマオの護国観音廟に今も残る1958年の石碑の碑文からわかる（芹澤 2018: 243）。

1954年の移動の時にハーコイの観音廟から神名を書いた位牌や祭祀用具を持って来た人物が、鄧玉光（別名は鄧保保）という名前であつたこともわかっている（観音廟理事會 2004）。

ソンマオに来てからもヌン族の華人は、陰曆二月二日の「春社誕」、陰曆二月十九日の「観音娘娘誕」、陰曆七月の「孟蘭節和中元誕」、陰曆十二月二十日の「求福—酬神恩」、という年中行事を行い、2004年までに、1974年と1992年の2回、「打大番」という特別な攘災儀礼を行った（観音廟理事會 2004）。

ハーコイに護国観音廟があつた時の「観音娘娘誕」では、中国で注文した半径15センチ、長さ30センチの花火に、番号と縁起のよい言葉を付けた竹の筒をつないで打ち上げ、落ちてくる竹の筒を競い合つて奪うという「焼花炮」というイベントがあつた。番号の付いた竹の筒は10個あり、「炮山」という廟内の10の位牌と対応しており、奪い取つた人は1年間、その神位を預かつた。ソンマオに来てからは花火を打ち上げることはせず、「炮山」をオークションして人々に分け与えるようになった（Tran 2013: 94-96）（写真2参照）。

現在ソンマオの護国観音廟には、「壬寅年」（1962年）に「花炮會」が建てた石碑が残つており、そこには第壹から第拾までの10個の「福炮山」を奉納した人々の名前が書かれている。さらに、その10個の炮山に加えて、次のようにハーコイから持って来た炮山についての一文もある。

「老第參福炮山 由河檜圩甲午年春 沐恩信士洗秀葵接奉 秋季一同南移抵堤 至甲辰年仲春寶誕着 弟洗秀芬佩送」

この古い3番の炮山は、甲午年（1954年）の春に洗秀葵がハーコイの護国観音廟で得



写真2 ベトナム・ドンナイ省・ロンカインの護国観音廟に並べられた炮山。手前右から「第一福炮」、「第四福炮」、「第三福炮」、「第五福炮」、と番号がついている（2017年8月、筆者撮影）。

て、その秋と一緒に南部へと持ってきたもので、甲辰年（1964年）になって弟の洗秀芬がそれをソンマオの護国観音廟に寄進した。碑文全体の年は壬寅年（1962年）であるため、甲辰年（1964年）の寄進のことが出てくるのは時代が前後しておかしいが、この行だけ文字の大きさが小さいので、後で書き加えられた一文であるのかもしれない。

この一文は鄧玉光が祭祀用具を持ってきた伝承と同様、ヌン族の華人の移動とともに観音廟の信仰が移動したことを明確に物語っているが、さらなる外国への再移住にまつわる後日譚がある。筆者がオーストラリアで入手した印刷物には、アメリカの同郷人からの寄稿として、とても興味深いエピソードが載っている。長くはなるが該当部分を以下に訳出する。

「北部から南部へと移動するころ、水上居民の家が2つあった。1つは洗姓で、もう1つは邱姓だった。〔洗家は〕第3号の福炮を得て船の上に祀ると、神のご加護で順風満帆、商売繁盛、南部へ逃げる時も観音廟へお返しすることなく持って行って家に祀った。南部へ来てからはサイゴンのチョロン地区に落ち着き、もう船には乗らず、プラスチック工業へ転業したところ、商売が波に乗り、何事もうまく行った。

しかし不思議なことにある晩、主人は家でおかしな夢を見た。夢で観音娘娘が主人に次のように告げた。『すでに何月何日どこそこに護国廟ができましたから、あなたは吉日を選んでその廟へ福炮を返さなければなりません。再び一年に一度のオークションにかけなければなりません。』目が覚めた後は半信半疑で、洗家の人たちは、その後このことを忘れてしまった。商売は忙しく、廟への道のりも遠く、返すのがめんどろで、しかも長年祀ってきたので返すのが惜しくなり、まさに何もしないので結果が出ないという状態になって、数年間は

商売も健康もすぐれなかった。そこでやっと家族は夢のことを思い出し、あわてて福炮を持って廟へ返しに行ったところ、その後は商売の成績が回復し、何事もうまく行くようになった。この冼家の子孫は1975年以降、アメリカのオレゴン州へと移住して不動産業に従事し、よい風水を得て事業は成功している。

また過去のベトナムの話にもどそう。1975年4月30日、南ベトナムが崩壊し共産党政権がベトナムを統一すると、一切の宗教活動を禁止した。そのため1975年の福炮のオークションが最後の回になった。この時にこの3号老福炮を得て祀ったのは頼姓の人だった。南部が共産党に占拠されると、人々の生活は苦しくなり、とくに華人は差別をされて不平等に扱われた。当時すべての華人は新しい生活を求めて密かに出国することを考えたが、この頼家は1978年に一度で出国に成功した。そして、この一番困難な時期に頼家の主人は福炮の香火をたずさえて家族とともに海を渡った。現在はドイツに定住して飲食業に従事し、『新皇城大酒楼』という華人資本最大のレストランを所有している。俗にいうように、信心があれば神は必ず応えるのだ。』(馬 2008: 35)。

1954年以降、ソンマオからヌン族の華人がベトナム南部各地へと再移住していくなかで、ヌン族の華人の居住地にソンマオの護国観音廟が分祀(中国語の表現では「分香」)されて護国観音廟がつくられ、ベトナム北部から継承したヌン族の華人の伝統文化が維持される重要な施設となった。ここでは本稿の関心から1975年のサイゴン陥落以降にベトナム国外へと再移住したヌン族の華人が、その移民先国家でどのように護国観音廟をつくっていったのかを見ておこう。

アメリカ・カリフォルニア州の「美國海寧同郷會(The Hai Ninh Community Association)」は、ロサンゼルス郊外のアルハンブラに新しい会所と護国観音廟を1996年に建設した。その時の特刊によると、同会は1991年に設立されてから3年後、1994年から護国観音廟建設のための募金キャンペーンを始めた(馬 1996: 178)。

キャンペーンでは、同郷人でベトナムの有名な画家である李克柔の作品の販売展示会をしたり、1995年の新年にディナーショーをしたりしている。また役員たちは、アメリカ国内のフィラデルフィア州やケンタッキー州を募金のために訪れ、同じカリフォルニア州の北部にあるサンフランシスコ、オークランド、サンノゼ、サクラメント(中国語では「二埠」)へは2度も募金集めに出かけている。アメリカ以外の国では、会長夫婦と副会長夫婦がヨーロッパを旅行し、オランダ、ベルギー、フランス、イギリス、ドイツなどの同郷の人々に募金を呼びかけている(馬 1996: 178)。

また役員は中国広東省の仏山へ出かけて、観音廟のための仏像、鐘、太鼓を注文している。そして朱秀南副監事長夫婦は、ソンマオへ赴いて「迎接観音娘娘蓮座」を行い、ソンマオの観音を分祀する手続きをすすめた(馬 1996: 178)。

「迎接観音娘娘蓮座」とは、特刊のなかの写真とその説明文によると、ソンマオの観音像の前で儀式を行い、そこで上げた線香の灰、霊符、バナーなどを受け取って持ち帰ることのようである(馬 1996: 178)。

アメリカ以外の国にもヌン族の華人の護国観音廟はある。カナダではバンクーバーにあるという (Tran 2013: 230)。パリではパリ郊外のシャントルー (Chanteloup) にあるという (Tran 2013: 230)。オーストラリアの護国観音廟については次節で紹介する。

5 オーストラリアのヌン族の華人

まずはベトナムからオーストラリアへの移民について、オーストラリア政府の統計から概観しておくことにしたい。

1975年までは、ベトナム生まれの人口は、わずかに700人しかオーストラリアにいなかった。1975年から1985年までのあいだに難民の再定住と、それに続く家族の呼び寄せが生じ、1981年までには49,616人のベトナム人がオーストラリアに定住した。しかし1990年代半ばの移民政策の変化によって難民の再定住は激減し、近年の移民は、もっぱら家族の呼び寄せのプログラムによる (Department of Immigration and Citizenship 2014)。

2011年のセンサスによると、185,039人のベトナム生まれの人口が現在オーストラリアにいる。そのうちニューサウスウェールズ州に71,838人 (38.8%)、ヴィクトリア州に68,296人 (36.9%) が居住している。2011年のセンサスでは、185,039人のベトナム生まれの人口のうち、135,300人がベトナム人の祖先をもつと回答し、42,166人が中国人の祖先をもつと回答している。なおこの質問には2つまで回答をすることができるため、1人の回答者がベトナム人と中国人の両方を祖先としてあげているケースもあると考えられる。そして、185,039人のベトナム生まれの人口が家庭内で話す言語については、ベトナム語が148,319人、広東語が24,700人となっている (Department of Immigration and Citizenship 2014)。

ヌン族の華人は、上記のベトナム生まれで中国人の祖先をもつ42,166人に含まれていると考えることができる。後述するヌン族の華人の同郷団体を設立し、現在も活発に活動している人々の多くは、自身がベトナム北部で生まれ、南部で成人してからオーストラリアへと移民した、オーストラリア移民の「一世」にあたる。

ニューサウスウェールズ州の州都シドニーでは、中央駅 (Sydney Central Station) の近くにチャイナタウンがあり、観光客にも知られている。しかし1975年以降にベトナムから来た華人にとってのチャイナタウンは、中央駅から電車で約1時間西へ行ったカブラマッタ (Cabramatta) の駅にある。カブラマッタよりも1つ手前の駅はキャンリーヴェイル (Canley Vale) といい、そこから歩いてすぐのところに「澳洲欽廉同郷會 (Australia Chin Lien Chinese Association)」がある。

その敷地に2000年に建てられている「澳洲欽廉 (欽縣 [ママ]、合浦、靈山、防城) 同郷會暨護國観音廟創建縁起」という碑の文章によると、同会は1992年に設立され、臨時

の事務所をカブラマッタのギルモアストリート (Gilmore St.) 17号に置いた。そして1995年に現在のこの土地を購入し、1996年から起工して1998年に現在の会所と観音廟が落成した。

このシドニーの護国観音廟に特徴的なのは、その廟に付設して遺灰を置く分譲墓地の建物「感恩堂」があることである。葬式互助会にあたる「福善堂」という組織もある。堂内の掲示によると、2009年時点ですでに死亡した福善堂の参加者は118人あり、現在の参加者人数は659人である。

会館組織と福善堂との関係は、2003年の特刊に掲載された規約によると、次のようになる。澳洲欽廉同郷会の会員になるには、すでに同会の会員になっている人の紹介で入会申請ができる。年会費は20オーストラリアドル（日本円に換算して約1,600円）である。この澳洲欽廉同郷会の下に「観音會」という別の組織があり、これは観世音菩薩を信仰していれば祖籍や民族とは関係なく誰もが参加できる。観音會の会員は観音會の年会費を払う必要はあるが、死亡した時には護国観音廟から花輪と100オーストラリアドルが贈られる。その観音會の下に福善堂という組織があり、福善堂に参加するにはまず観音會の会員にならなければならない。福善堂の参加者は他の参加者が亡くなった時に「互助金」として10オーストラリアドルを出す。参加する観音會の会員は、加入時にまず30オーストラリアドル（互助金3件分）を前納しておく必要がある（澳洲欽廉同郷会2003）。

2010年8月に筆者が訪問した時には、廟内に「光明之行廣西防城慈善之旅」という見出しの地元の中国語新聞の記事が貼られ、同年6月に澳洲欽廉同郷会の役員が中国広西チワン族自治区の貧困地区を訪れて、白内障の手術などを行う慈善活動に参加したことが報じられていた。堂内に貼られた過去の活動の写真では、中国との交流は取りあげられていたが、ベトナムとの交流は取りあげられておらず、中国と比べてベトナムとの関係は希薄な印象をもった。

いっぽうヴィクトリア州の州都メルボルンの護国観音廟は、チャイナタウンのある中心部の駅から電車で1時間ほど南へ行った郊外にある（写真3参照）。駅名は、スプリングヴェイル (Springvale) になる。この駅から護国観音廟へと歩いて向かうまでには、漢字の他にベトナム語やクメール語なども看板に書かれた商店の並ぶ地区があり、ベトナムをはじめとするインドシナからの華人を中心にしたチャイナタウンになっていて、その入口には牌楼もある。

護国観音廟を併設した「澳洲維省欽廉同郷会 (Australia Chin Lien Chinese Association of Victoria Inc.)」は、1995年の創立である。護国観音廟の一周年を記念して出された特刊にもとづく、現在の場所に土地を買って会所と観音廟を建てたのは2006年のことで、シドニーの澳洲欽廉同郷会から5万オーストラリアドル（日本円に換算して約400万円）の寄付を得ている（澳洲維省欽廉同郷会2008）。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

観音廟の堂内には、中央に観音、向かって右に財神、向かって左に関帝が祀られている。案首公公と伏波將軍が祀られていないのは、シドニーの護国観音廟と同じである（芹澤 2014）。

澳洲維省欽廉同郷會の主たる行事は旧暦の新年の一日（「初一」）と十五日に精進料理を食べることで、他に年間を通じて日曜日に隔週で精進料理を食べている。会員は約300人で、そのうち役員が30人。精進料理の行事の時には百数十人が来るという。

また旧暦の七月には、メルボルン在住のヌン族の華人の道士が来て盂蘭盆の儀礼を行う。この道士は同郷の人々の葬儀も担当しているという。

神像が置かれた部屋に隣接して事務所の部屋があり、そこには2013年に中国で地震があった時に義援金を贈ったことの感謝状や、防城港市、香港の広西同郷總會、ベトナム・ドンナイ省・ロンカインの護国観音廟から贈られた記念の盾などが置かれており、外国との活発な交流がうかがえた。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

6 おわりに

ヌン族の華人の民族文化の重要な舞台は、護国観音廟という宗教施設である。その起源には、19世紀に中国広東省恩平県からベトナム北部の市場町ハーコイへと入ってきた客家人の移民があるが、ヌン族の華人のすべてが客家人ではなく、護国観音廟も客家人だけのものではない。

1954年にベトナム北部からベトナム南部へと移住したヌン族の華人は、ハーコイの護国観音廟から持ってきた香炉の灰などを頼りに、集団移住先のビントゥアン省ソンマオ

に護国観音廟を再建した。そしてビントゥアン省から、ドンナイ省などのベトナム南部各地へとヌン族の華人が再移住するなかで、ベトナム南部の各地に護国観音廟がつくられた。

もともとフランス軍の軍人を多く輩出し、続くベトナム戦争の時代にもベトナム共和国軍の軍人になった人々の多いヌン族の華人は、1975年の南北統一を機に、多くのメンバーをベトナム南部から外国へと移動させた。

本稿ではボートピープルとしての脱出と難民キャンプでの生活のなかで、ヌン族の華人がいかにかに結束し、すでに外国に定住した同胞からの支援をいかにかに受けていたのかということについては扱わなかった。しかし、ハーコイからサイゴンへ、そしてアメリカ、ドイツへと引き継がれた護国観音廟の縁起物のエピソードに見られるように、国外への脱出と移民先国家への定住のなかでも護国観音廟の信仰は引き継がれ、例えばアメリカからソンマオへ1990年代にわざわざ戻って香火を受け継ぐことで、カリフォルニアには護国観音廟がつくられている。

オーストラリアに定住したヌン族の華人の場合には、アメリカやヨーロッパ諸国の同胞と比べてベトナムとの関わりは多くないが、主たる集住地域であるニューサウスウェールズ州とヴィクトリア州に、1990年代に同郷会がそれぞれ設立され、いずれも現在はそこに護国観音廟が併設されている。これらの同郷会では護国観音廟を中心に葬式互助会を設けたり、日曜日に精進料理の食事会をしたり、同郷の道士による盂蘭盆の行事を開催したりすることから、ヌン族の華人がベトナムに帰国することなく、移民先国家のなかで自分たちの伝統的な生活を維持できるような活動が行われている。

そしてオーストラリアのヌン族の華人は、同郷会や個人単位で、ヌン族の華人が今も多く住むベトナム・ドンナイ省の学校や宗教施設に金銭的な貢献を行っている。

謝辞

本論文は、JSPS 科研費の助成を受けた研究課題、JP16251007、JP22251003、JP26300038、JP17H04515、の研究成果の一部である。

注

- 1) 日本においては、文化人類学・華僑華人研究以外の分野でオーストラリア移民研究が盛んに行われてきた。よく知られている戦前の和歌山県出身者による真珠採集については、近年も村井吉敬のグループが研究を出している（村井他 2016）。また地理学では、日本以外のアジア移民のオーストラリア各都市での定住について、堤純らが共同研究を行い、成果を最近公刊している（堤 2018）。国際社会学や国際関係論では、オーストラリアの多文化主義に関心が寄せられ、

関根政美、塩原良和らが、オーストラリア社会における移民の包摂について今まで多くを論じてきている（関根 1989；塩原 2017；増田 2017a, 2017b）。なかでも石井由香による、代表的なアジア系移民二世作家（両親はカンボジアの華僑華人）、アリス・プン（Alice Pung）の著作についての研究は、オーストラリアの華僑華人の先行研究としても重要である（石井 2016）。文化人類学及び華僑華人研究の分野では、パプアニューギニア出身の華僑華人が組織するカトリック信徒団体についての市川哲の研究が重要な先行研究になる（市川 2005）。文化人類学の強みは、他の分野で行われている「アジア系」一般を中心にしたオーストラリアの多文化主義や移民定住政策についての研究にも目を配りつつ、特定の人々に寄りそってオーストラリアに住む人々の具体的な暮らしのデータを集めることであろう。本稿の研究が目指している方向は、市川の研究と同じく、宗教施設での観察や聞き取りから特定の華僑華人グループの個性を具体的に示すものである。しかしオーストラリアのパプアニューギニア華僑華人とオーストラリアのヌン族の華人とでは、世代の深度や個人の移民経験が、かなり異なる。前者は19世紀末から20世紀初頭にかけて中国から現在のパプアニューギニアに移住し、その後1950年代から60年代にかけてオーストラリア国籍を取得し、子供をオーストラリアへ送って教育を受けさせることから成立した（市川 2005：9）。後者は本稿で後に示すように、ベトナム北部の自治区からベトナム南部へと移住し、その後南部の中で再移住し、さらに難民としてオーストラリアに定住したという過程のすべてが、20世紀後半に起きている。この特異な経験によってヌン族の華人の事例は、中国から海外への客家人移民としても、ベトナムから出国した難民としても、オーストラリアの華僑華人としても、いずれも代表例としては扱いにくい性格をもっている。

- 2) 筆者がオーストラリアのヌン族の華人から聞いた、19世紀から20世紀にかけての客家人移民についての説明は、次のようなものである。観音は光緒年間〔1875-1908年〕に開平・恩平から来た客家人が持ってきた。客家人は開平・恩平で械闘〔地元の広府人との武力闘争〕に負けて南へ逃れたが、よい土地はなく、防城でも山のほうにいた。最初は防城からモンカイのほうへ働きに行っていたが、やがてモンカイのほうへ定住した。モンカイにはベトナム人が住んでいなかった。農業をしたり、ホンゲイ（Hông Gai）炭鉱で働いたりしていたが、後にフランス人が軍人に雇うようになった。「儂族」という名前もフランス人がつけた。
- 3) 中国広西やベトナム・ハノイにおける「粵東会館」の「粵東」とは、現在の広東省の東部にあたる地域を指しているのではなく、東から西の広西へと進出した広府人にとっての出身地、文字通り「広東」を指している。

参考文献

〈日本文献〉

石井由香

2016 「オーストラリア・アジア系専門職移民の文化・社会戦略—ある作家の自叙伝と文化・社会活動に注目して」『国立民族学博物館研究報告』40(3): 375-410。

市川哲

2005 「華人のエスニシティと宗教—オーストラリアにおけるパプアニューギニア出身華人のキリスト教団体」『宗教と社会』11: 3-24。

塩原良和

2017 『分断するコミュニティ—オーストラリアの移民・先住民族政策』東京：法政大学出版

局。

関根政美

1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア—多文化社会オーストラリアの社会変動』東京：成文堂。

芹澤知広

2014 「移民と宗教」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp. 152-153, 東京：丸善出版。
2018 「ヌン族の華人の祀る神—中国・ベトナム・オーストラリアの実地調査から」『アジア・アフリカ地域研究』17(2): 227-257。

堤純編

2018 『変貌する現代オーストラリアの都市社会』つくば：筑波大学出版会。

増田あゆみ

2017a 「多文化主義」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』pp. 184-185, 東京：丸善出版。
2017b 「オーストラリアの華僑華人」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』pp. 420-421, 東京：丸善出版。

村井吉敬・内海愛子・飯笹佐代子

2016 『海境を越える人びと—真珠とナマコとアラフラ海』東京：コモンズ。

〈英文文献〉

Department of Immigration and Citizenship

2014 *Community Information Summary: Vietnam-born*. Canberra: Department of Immigration and Citizenship, Australian Government.
https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02_2014/vietnam.pdf (2019年6月22日閲覧)

Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office

2010 *The 2009 Vietnam Population and Housing Census: Major Findings*. Hanoi: Department of Population and Labour Statistics, the General Statistics Office. http://www.gso.gov.vn/Default_en.aspx?tabid=491 (2014年7月21日閲覧)

Miles, S. B.

2017 *Upriver Journeys: Diaspora and Empire in Southern China, 1570-1850*. Cambridge (Massachusetts): Harvard University Asia Centre.

Tran, D. L. (ed.)

2013 *The Nung Ethnic and Autonomous Territory of Hai Ninh-Vietnam*. Taipei: May King Enterprise.

〈中文文献〉

澳洲維省欽廉同郷会

2008 『澳洲維省欽廉同郷会十二週年暨護国観音廟週年特刊』Springvale, VIC: 澳洲維省欽廉同郷会。

澳州欽廉同郷会

2003 『澳州欽廉同郷会慶祝創会十週年特刊』Canley Vale, NSW: 澳州欽廉同郷会。

觀音廟理事会（編）

2004 『平順省北平県海寧社 潼毛護国觀音廟』平順省北平県海寧社：觀音廟理事会。

胡芳蘭、范篁君（編）

2007 『胡志明市与南部 華人黄金篇』河内：労働出版社。

黄濱

2005 『近代粵港客商与広西城鎮經濟發育』北京：社会科学出版社。

黄麗生

2012 「遷移渡海の小百姓与大歴史——以合浦新民客家吳氏宗族為例」房学嘉等（主編）『多重視角下的客家傳統社会与聚落文化』pp. 21-78, 広州：華南理工大学出版社。

清風

2005 『『儂族』考』王建周（主編）『広西客家研究総論 第1輯』pp. 342-351, 桂林：広西師範大学出版社。

張侃、壬氏青李

2018 『華文越風 17-19世紀民間文献与会安華人社会』厦門：厦門大学出版社。

馬玉強

2008 「欽廉鄉親標花炮一段伝奇」澳洲維省欽廉同郷会『澳洲維省欽廉同郷会十二週年暨護国觀音廟週年特刊』p. 35, Springvale, VIC：澳洲維省欽廉同郷会。

馬昭君（主編）

1996 『美国海寧同郷会籌建新會所暨護国觀音廟紀念特刊』加州·阿罕布拉市：美国海寧同郷会。

梅伝強、張国雄（主編）

2001 『五邑華僑華人史』広州：広東高等教育出版社。